



2 学年修学旅行～長崎・鹿児島・関西への旅～

2年生は、今月の6日(火)～8日(木)の2泊3日で九州(長崎・鹿児島)、京都・大阪方面に修学旅行に行ってきました。中学校時代は、新型コロナウイルス感染拡大のため、それまで当たり前のように行っていた京都・奈良への修学旅行が取り止めとなり、非常に残念な思いをしたようです。現在もコロナ禍ですが、学校としてもなんとか全員



長崎平和公園

が行って来られように、可能な限りの対策を取り、また感染防止を徹底して実施しました。

帰ってきてから生徒に様子を聞くと、長崎の原爆資料館や鹿児島の知覧特攻平和会館見学で平和の尊さを改めて実感するとともに、級友と過ごした3日間は高校時代のかげがえのない思い出の1ページになったようです。



知覧特攻平和会館

サッカーW杯カタール大会に思う



中東のカタールで開催されている(された)サッカーW杯、日本は1次リーグで優勝経験があるドイツ、スペイン、そして堅い守りのコスタリカと同じグループ、いわゆる“死のグループ”に入り、多くの国民は、ベスト8はおろか決勝リーグ(ベスト16)に進出することさえ無理だと思っていたと思います。(私自身も無理だと思っていました)。しかし、その予想に反して、ドイツ、スペインを撃破し1次リーグを突破、ベスト16! 決勝リーグでは今回もクロアチアに敗れ、残念ながら“新しい景色(ベスト8)”を見ることはできませんでしたが、日本チームの活躍には、「やればできるんだ」と大いに勇気づけられたのではないのでしょうか。

そんな中、前々回(2014年ブラジル大会)の優勝国ドイツが、前回(2018年ロシア大会)と今回、続けて1次リーグ敗退という結果に終わり、ドイツ国民には大きな衝撃だったようです。このことについて、ある新聞には「サッカーの戦術が進歩した分、指導者が選手を教え過ぎている。選手を支配せず、もっと自由にプレーをさせることが必要だった」また別の新聞には「近年は教科書通りのプレーをたたき込まれた弊害として、突出した選手が生まれにくくなった」などの記事がありました。

一方、“ドーハの悲劇”を“ドーハの歓喜”に変えた森保監督は、その著書『プロサッカー監督の仕事』の中で、「僕は羊飼いのように群れを上から統率して導くというよりも、同じ目線でワンワンと吠(ほ)えて『こっちに行くんだぞ』と仕向ける、後ろからいつのまにか選手に方向づけをする牧羊犬」であると記している。

今高校では、講義形式で教科書の内容だけを教える授業ではなく、生徒の主体性や自主性を重視した学びの推進に取り組んでいます。このことにより、先生の役割はグイグイと引っ張る(教え込む)のではなく、森保監督のように生徒の“伴走者”として、生徒が個々に持っている資質・能力を引き出し、伸ばしていくという役割に変わっていく必要があるのではないかと思います。

